
さよなら超能力者

百時 紅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さよなら超能力者

【NZコード】

N4232R

【作者名】

百時 紅

【あらすじ】

世界の超能力者、または一般的にありえない力をもつ者が消えて
いる…

束切レイカの親友、赤野真悟も消えてしまい、レイカは真悟の行方
を知ろうと奮闘する。

?

夕日が、とある教室にさしかかっていた。

ありきたりな教室で向かいあっているのは、この学校の制服をきた男女。

「くそっ！ 一歩おそかつたか！…」

「じめんね。赤野クン」

憤慨する男子生徒とクスクスとほほ笑む女子生徒。

男子生徒はどこにでもいる高校生で、女子生徒は童顔で長い黒髪をなびかせていた。

「…おれはどうなるんだ。」

赤野クン、とよばれた男子生徒は女子生徒に問いかけた。

「もちろん。アルカディアにきてもううの。そこから先は向こうに着いたらわかるわ。」

女子生徒はまたクスクスとほほ笑んだ。

「…レイカにはやく伝えるべきだったか…！」

「あらあ。大丈夫よ。あなたのお友達の名前はリストの最後のほうだから。」

「どうちこしる、あいつも連れてかれるんだろう…。」

「そうね。だから、、、」

女子生徒は一歩ずつ赤野クンといつた男子生徒に近づいた。

「今は、自分の心配をしたりどうかしら？」

「くそつ…！」

男子生徒は悪態をついた。

「さよなら、超能力者リスト？〇三赤野真悟。」

ヒュンツ

ふと風をきる音がして、つぎの瞬間には一人はいなかつた。

夕日はまだ教室をさしていった。

?

さて今日はどんな風にくるだらうか…

なにもはいってなさそつた鞄を手に、束切レイカは廊下を歩いていた。

たまには時で顔面を突くとか、いや、ナチュラルにふつつのパンチでもいいだろ？

物騒なことを考えていた。

ガラツ

1-B とかかれた教室のドアを開けてレイカは身構えた。

…なにもこない。

「…アレ? ?」

1 - B、教室のすみ。

「なあ友哉。今日は珍しく真悟いねえのか？」

「うーん。」

「ふーん…」

「……」

「……」

「バカでも風邪ひくんだな。」

「うーん。」

「……」

窓からは気持ちのいい風と口差しがはいつていた。

レイカは岸草友哉としゃべっていた。

ところが一方的につぶやいていた。

なんだ、珍しい。

珍しい、という言葉をもつ一度心のなかで言った。

いつもの朝。

からず俺が教室を開けると真悟があいさつをする。

で、

たから、
殴る。

そんな感じで毎日が成り立っていた。

キー-->□-->

チャイムが鳴り響いて、友哉に軽く手をふり席に着いた。

「えー、これで冬休みにはいるわけですかー、なるべく気を一ぬかないよつにー。」

風邪：ねえ。

あいつが病気で休んだのを見たことがない。

といつても中学のころからだが。

ボーッと外を眺めた。

ゴスツツ

額に強烈な痛みがはしつた。

「イツテエー！」

「つーかーぎーりー…。いまは自然観察じゃなくて先生の話を聞こうなあ。」

さつきから眠くなりそうな声でしゃべっていた担任がお約束のよつに白いチョークを投げた。

す「」にコントロール力である。

クスクスと女子の笑い声が上がった。

「とーもやー。かえろーぜー。」

「…おまえ、荷物それだけなのか?」

「は?」

「…まさか明日から冬休みだつて」ときいてねえのか?」

「へ?」

はあ…

友哉はこれ見よがしにため息をついた。

「バカな友人をもつと苦労する…」

「んだと」「アア…！」

窓からは気持ちのいい風と日差しがはいつていた。

?

(11・30。赤野邸集合。必ず来い)

「ああん？？」

レイカは寝起きでボサボサの髪をかきむしりながら顔を歪ませた。

冬休みにはいつから4日が経っていた。

そして今日は25日。クリスマスである。

恋人もなにもいないレイカは今年もさびしく家族でぱーていーか、と思っていた。

そして今。

友哉からの簡潔すぎるメールにくびをかしげた。

真悟になにかあったのか…？

それとも3人でクリスマスパーティーか？

お調子者の真悟がいるならぜつたに後者だな、と思いながらいそ

いそと身支度をはじめた。

「ショーゲねえ。いつてやるか。」

もちろん。

母親が少し前に買つてきた今日のためのクラッカーを一つ持つて。

もう心はクリスマスである。

パアアア――――ン!!

「メルイークリスマス!!」

派手なクラッカーの音でチャイムもならわずレイカは真悟の家の玄
関を開けた。

たぶん相当近所迷惑だらう。

だが、のりにのつたレイカはまったく気にしていなかつた。

ガラツとコビングの戸があいた。

おっ、ノリノリの真悟が、クラッカーをこっちに向けて放つだろう。
とすこしレイカは身構えた。

だが。

「なにやつてんの、お前。」

浴びせられたの冷え冷えとした友哉の声だった。

「…ん？」

友哉の顔は、クリスマスパーティーじゃないではない、とこつ感じの
暗い顔だった。

「真悟が帰つてきていないうじい。」

「はあ？」

先ほどのテンションも落ち着いたレイカはいつむいてこる一人の子どもの顔をみた。

「五日前に学校に行つたきり、かえつてきてない……」

真悟によく似た顔の男の子はたしか、弟の赤野加波で中2だとか。

もうひとつの方の子は、妹の赤野瑠香、小1。

「どうか、旅行についてんじゃねえの？」

「……いや、たぶんそれはない。」

友哉が答えた。

「なんで。」

「あいつは単純だから旅行いくなりこくで俺達に血盟するはずだ。」

真悟のことをよくわかつてんなあ、と感心しながらうなずいた。

「な、なるほど……」

「加波兄ちゃん…眞悟兄、帰つてくるよね？ 今日ね、くりります
なんだよ。」

「…大丈夫だ」

瑠香は加波の手を握つた。

「…しょーがねえ。ひとつだけツテがあるんだ。そいつにあたつて
みる。」

「… ありがとう。」

加波と瑠香の顔がパツと明るくなつた。

「おう！ 任しどけ…！」

「…と、言つたのはいいが…大丈夫なのか？」

帰り道、友哉は聞いた。

「おう… とりあえず姉キに聞いてみるよ。」

「…リンカさんか…」

「絶対みつかるはずだ！」

?

「3000円。」

目の前にさしだされた手にレイカは冷や汗をかいた。

「な、頼むつてもうちつとまけてくれ。」

「じゃあ3000円。」

「1円もまけてくれねえのな！」

「しようがないね。2999円で手をつつたげる」

「イエーイ！　ってほんとに1円しかまけてくれねえんだ！」

レイカは友哉と別れてすぐ、自宅に行つた。

束切リンク。

レイカの高2の姉。

そして、彼女は人のオーラを読み取つて追跡できるという超能力をもつ。

「な、頼むつて。おまえの力が必要なんだ。」

「消しゴムしかもちあげられないあんたに頼まれたくない。」

「なんだうー！」

そして、レイカも超能力者である。

所謂、物体浮遊能力。

だがせいぜい消しゴムを持ち上げる程度。

だから言い返すことができない。

「…くそっ。今月の小遣いとぶけど…。まあいいや。3000円払うからとうあえず頼まれてくれ！」

「…しょーがないね。」

めずらしく必死なレイカみてリンクはOKをだした。

だが元の値段にはかわらない。

「よつしゃー！」

「で、なにをしてほしいの？」

「それはだな、」

レイカはさきほど話をリンクにした。

「あるほどね…その真悟くんの居場所がしりたいわけか。」

「おう！」

「ところであんた。」

「？」

「あたしが人のオーラを見るにはその人が三日以内につかったモノがないとダメってこと、知ってる?」

「あ……」

?

「え、えいじょい...」

れいじょの血痕もむなしく、レイカはその場に崩れおちた。

「あーあ。なんていいわけあるの?」

「.....」

レイカはついに黙りこくれてしまつた。

「.....」

見かねたリンカが声をかけた。

「ねえ、どうすんの?」

「...ひとつだけ、気になるヤツがいる。」

「はあ?」

「とつあえず、そいつん家行つてみる。」

「え、だれのところ?..?」

「南村由梨」

レイカが彼女の家を知っているのは、以前真悟といふな会話をしたからだつた。

「なーレイカ、雨村由梨つて知つてつか？」

中学2年のとき。

真悟と知り合つて仲良くなつたのは中1の半ばだった。

その真悟がこんなことを聞いてきた。

「アマムラコリー？　だれだそれ。おまえナンパでもしたのか？」

冗談めかして言つたが、お調子者の真悟が真剣そうだつたためまじめに聞くことにした。

「まだレイカと仲が良くなる前にだな俺の友達に形野圭太つ一つやつがいたんだ。そいつも、まあ、軽いちょっと変わつた能力を持つててな、」

「え、ちょっとまで。おめえ、俺以外にもそーゆー能力もつた知り合いいたのかよ？」

「まーな。圭太の能力もおまえと同じ、物体浮遊能力だ。」

「へえ～。けっこひいるもんなんだな。」

「でもあこいつの場合はけっこいつ重いもんも浮遊させることができたんだぜ？」

「うるせーよ。…ん？ ちょっと待てよ。この学年にカタノケイタなんてやついたか？」

「そこなんだよ。圭太は中1の夏休み前に姿を消したんだ。」

「へ？」

「まるつきり、なんの跡も残さず。」

「なんだそれ？ 親とかはビックリなんだよ」

「圭太に両親はいねえ。あいつの両親小学校のときには両方ともなくしてゐる。」

「けっこひ状絶だな…」

「ああ。だから、探す人もとくにいなかつたんだ。」

「で、それがどうして、アマムラコリって女と関係あるんだよ。」

「圭太が消えたのがその雨村由梨が転校してきてからだったからだ。」

「

「……」

「なんらかの関係があるとみてもいいんじゃねえか?」

「だけど…よく考えれば、雨村由梨なんて女も聞いた事ねえ…」

「せいつもすぐになくなつたからな。」

「ふーん。どうもねえつてわけか…」

その後、一人が高校にあがり2年になつたとき、一人はその雨村由梨と再会することになるのだった。

「なあむせじわ。」

「だからほほ雨村がなにかを知っていることにならぬねえ。」

「わかつた。あたしもつこつてたゞる。」

「おひー。」

「といふで、家は知つてんの?」

「……河取通りのへんつていとべりこね……」

「……使えね——」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4232r/>

さよなら超能力者

2011年10月6日19時50分発行